

雁の記

中院の話

川越散策日記

荒牧 澄多

(高二十七回)

前回、不染亭を訪れたので、引き続き中院の境内を見てみましょう。

中院は、喜多院と同じく天長七年（八三〇）に慈覚大師円仁によって創建された星野山無量寿寺の一院です。元久年間（一二〇四）〇六）に兵火で荒廃しますが、永仁四年（一二九六）に尊海僧正が再興して談義所である仏地院（中院）を



中院の大門

興しました。また、後の喜多院である仏蔵院、南院である多門院も興します。そして、正安三年（一二〇二）に関東天台宗総本山となりますが、徳川家から信の篤い天海僧正が喜多院に就くことにより喜多院が隆盛します。

中院の堂塔は、寛永九年（一六三二）に現在の東照宮の所に建てられました。が、同一五年（一六三八）の川越大火で類焼し、翌年東照宮造営のため、現在地に移りました。

川越総合高校に面して建つ大門は、市内有数の規模を誇り、中院の格の高さを知らしめてくれます。扉が付く本柱と背後の控柱の中間に棟がのる薬医門という形式ですが、その間に柱が入る特異な形です。建て

本堂縁の向拝



られたのは改修時に発見された墨書から、明和五年（一七六八）四月、古谷本郷の木工棟梁儀衛門茂政によることが分かりました。

本堂は、縁起によると享保六年（一七三三）に造営されました。寄棟造り棧瓦葺きで正面のみ縁がついています。ご本尊を拝んだ後に、向拝ゴハイを見上げてみましょう。正面には、間口三間の幅いっぱい龍の彫り物が入っています。側面を見てもみましょう。向拝柱と本堂をつなぐ虹梁ニライの上には、笈形オウガタをつけた大瓶束タイハイヅカを立て

ています。さらにその上に。大斗と絵様肘木で桁を支え、さらに、海老虹梁エビニライと手挟みタバサを配しています。鐘楼門は、寄棟造りの楼門で上層に鐘をつっています。一八世紀中ごろの建築と推定される簡素な建物です。

赤門は、四脚門の形式をとるものの、本柱が棟より前にずれています。特徴的なのは、柱の風食が甚だしいことで、寛永の大火で焼失を免れた四〇〇年前のものとの伝承があり、当時の古材を使って再建された可能性が高い建物です。

なお、境内には、「狭山茶発祥之地」の碑が立っています。狭山茶の基となった河越茶は、慈覚大師円仁が京都より茶の実を境内に植えて薬用として栽培したことが始まりといわれています。南北朝時代に成立した「異制庭訓往来」には、茶の産地として武蔵国以北

では唯一日本五場のひとつし「武蔵河越」の名が挙げられています

さらに、境内には、前号でご紹介した島崎藤村の義母加藤みきや川越の地誌「多濃武之雁・宝暦三年（二七五三）」を記した秋元



狭山茶発祥之地の碑

家の家臣の太陽寺盛胤の墓所もあります。

春はしだけ桜で有名ですが、新緑の五月、秋の紅葉も見事ですので、四季折々に訪れてはいかがでしょうか。

参考 中院ホームページ、川越の寺院建築（川越市教育委員会）等

野球部

野球部OB会会長

齊藤 栄 (高二二回)



甲子園出場の雄姿

百年を迎えた野球部

野球部創部百周年記念式典がちょうど百名の参加で盛大に行われました。小山友清・埼玉県高等学校野球連盟専務理事、松下英志・毎日新聞さいたま支局長を始めとする多くのご来賓を迎え祝辞を頂きました。創部百周年史を来賓及び申込者に配布しました。

この記念事業は二〇一三年四月のOB会役員会にて

野球部創部百周年の件が議題に上がり、その準備を役員全員で対応していくことが決まりました。

百年史作成実行委員会を立ち上げ、二〇一六年十月に第一回実行委員会を開催し、編集作業が本格化しました。二年の年月をかけて、

百年史は完成しました

しかしながら、七十年史の足元にも及ばず、満足な出来とは言えませんでした。百年史刊行に当たって、八田英二・日本高等学校野球連盟会長を始めとする多くの方々にお祝いのお言葉をいただきました。

また、揮毫は故渋谷健先生(元川越高校校長)の奥様渋谷成子様をお願いしました。「健先生もOBも喜んでくれると思います」とお話ししたところ、喜んでお引

き受けいただきました。また、編集委員の皆様のご尽力、ご努力により完成することが出来ました。

なお本校は、明治三三年に県西部に第三中学校として創立しました。翌三三年には校友会に野球部費が計上されています。しかし、初めて対外試合を行った一九一八(大正七)年を創部の年としています。

私と野球部

私の在学時の監督は甲子園出場経験のある故宮根七郎先生(高二二)でした。同期は優秀な選手が多数入部しました。しかし、厳しい練習についていけず最後まで残ったのは五人でした。

不器用な私は全てのポジションを経験しました。あのポジションに慣れると他に移されました。卒業後、酒の席でその悔しさを宮根先生に愚痴りました。監督は「斉藤は将来指導者に成ると思つて全てを経験させ

た」と答えました。大学卒業後、城西川越高校の監督になった私はこの経験を生かすことが出来ました。

城西では甲子園出場時の監督・家村相太郎さん(中三四)にご指導いただきました。

川越市駅の近くから落合橋近くのグラウンドまで自転車で来るのは大変きつかったことと思います。家村さんは「こうしなさい」という指導はしませんでした。例えば投手のボールの握り方について「君は今こ

とろいろ試してごらん。そして君に一番合う方法を見つけてください」といった方法でした。そして選手を褒めることに徹していました。

晩年、お会いしに行きました。家族から「孫のことでも判らない状態なので合わない方がよい」と言われましたが、会うと「斉藤君、元気になったらまたグラウンドに行くからね」と声を掛けられました。野球に対する情熱の強さを感じさせられました。

春季散策会

加島 篤人

(高三十四回)

笠間稻荷神社と陶芸美術館

六月八日、この日梅雨入りということ、薄曇りのなか、二十五名の参加で川越を出發、一路笠間を目指しました。

笠間といえば、笠間稻荷

神社が有名です。日本三大稲荷に数えられる(諸説あります)この神社は、創建が今から約一三五〇余年もの昔の六五一年といわれており、古くから殖産興業の



笠間稲荷にて

守り神として崇拜を集めて
います。事務局でこの旅を
計画し、二月に皆様に要項
をお知らせした時点では知
るよしもなかったのですが、
会の仲間で、高八回の三重
正宏さんが、笠間稲荷神社
の塙宮司と従兄弟同士とい
うことが判明しました。三
重さんには、事前下見にも
同行して頂き、この旅への
便宜を図って頂きました。
十一時には笠間稲荷神社
に到着し、全員で本殿に昇

本大震災の時に笠間地域は
大変な揺れが襲い、いくつ
かある鳥居が倒壊し、まだ
すべては元通りにはなっ
ていないとのことでした。
神社を後にして、隣接す
る蕎麦屋で昼食を取りなが
らの懇親会を行い、再びバ
スに乗車して茨城県陶芸美
術館へと向かいました。
笠間と言えばもう一つの
名物は「焼き物」です。益
子焼と並び関東有数の陶芸
の里である笠間ですが、江

殿し、「川越初雁会」
として祈禱を受けまし
た。その後別室に案内
され、精進料理を頂き、
塙宮司よりビールを頂
きながらの講話をお聞
かせ頂きました。
少々雨が降るなか、
境内を太田権宮司の案
内で散策しました。神
社の本殿は江戸時代か
らの古い建造物で、微
細な彫刻が印象的でし
た。また八年前の東日

戸時代中期に信楽から来た
陶工が窯を開いたのが始め
とされており、歴代の笠間
藩主の庇護のもと、発展し
た経緯があります。現在も
官民一体となつて、若手の
陶工を支援しており、大き
な窯元は十軒、小さいのを
含めると約二百五十もの窯
元があるとのこと。
陶芸の里の中心にあるの
が、今回訪れた茨城県陶芸
美術館です。展示の中心は、
笠間が生んだ名工・松井康
成と板谷波山の作品で、色
彩豊かな松井、気品のある
波山、という印象を持ちま
した。陶芸の歴史、伝統、
近代とを十分に体験するこ
とができました。

ゴルフ同好会

優勝者 田中栄

(高二十五回)

三月六日に川越カント
リーで開催されました第
十五回初雁会ゴルフコンペ



に優勝させ
て頂きまし
た。コンペ
運営にいつ
も尽力くだ
さる担当の
皆様には、
大変お世話
になり厚く
御礼申し上
げます。
運よく優
勝できまし

たのは、白田様、田島様と
パートナーに恵まれ 日楽し
くりラックスしてゴルフが
出来ましたこと、また新ペ
リアのハンデキャップにも
恵まれたことかと思えます。
平成最後のコンペに優勝で
きましたこと、感謝申し上
げます。今後ともよろしく
お願い申し上げます。

十六回コンペのご案内

ゴルフ同好会幹事

松本 寛

日時 令和元年十月三日(木)

集合

八時十五分

場所 八時五十六分スタート

川越カントリークラブ

会費 四千元(パーティー費)

プレー費は各自精算

返信期日 九月十日までに

葉書にて返信ください。

今回から往復葉書の送信は

中止しましたので、各自葉

書を用意していただいで、

〒350 1122

川越市脇田町十七の十

松本 寛宛に郵送くださ

い。

事務局からのお願い

年会費二千元未納の方は、

お早めに納入をお願いいた

します。振込先は欄外にあ

ります。

発行人

会長 岩堀 弘明

事務局長 加島 篤人

事務局 川越市六軒町一三三

題字 吉沢翠亭(義和)

印刷 (株)櫻井印刷所